

〈研究ノート〉

## 上級生模擬患者による看護学生の学び

Acquirement of the Nursing students who exploited the advanced learner's Simulated Patient  
in adult nursing practice

新井 祐恵<sup>1</sup>, 北尾 良太<sup>2</sup>, 池田 七衣<sup>3</sup>, 中本 明世<sup>4</sup>, 山中 純瑚<sup>5</sup>, 竹村 節子<sup>6</sup>

### 要 旨

本研究は、看護学部上級生（4年生）による模擬患者（SP）を活用した成人看護学演習において、受講した同学部3年生106名を対象に、この上級生SP演習授業による学びを明らかにし、臨地実習に向けた成人看護学演習の教育方法について示唆を得ることを目的とした。研究者間で作成した自記式質問紙調査を行い、99名（回収率94.3%）の学びについての回答を、質的帰納的に分析した。その結果、44コード、25サブカテゴリー、および【準備の大切さ】【目的・根拠を考えたケア】【患者に適した看護のありよう】【患者への配慮】【看護の現実味】の5カテゴリーが生成された。また学びとはならなかったが、『自己の振り返り』や『先輩の存在から感じたこと』についても抽出することができた。上級生SPは、経験や訓練が必要な一般のSPと比較して、実習経験から学生へのフィードバックができていることから効果的である可能性が示唆された。また上級生SPを活用した演習を領域実習前に取り入れることは、実習での学生の過度な緊張や不安を和らげ、看護援助や患者理解を深める効果が期待できる。

キーワード：上級生, 模擬患者, 成人看護学演習, 看護学生, 学び

Advanced learners, simulated patient, adult nursing practice, Nursing student, acquirement

### I. 諸言

7対1看護の導入とともに質の高い看護が要求される昨今、看護師にとって患者に提供する日常的なケア場面は、看護の質の良し悪しが顕著に表れる。言い換えると、患者の療養生活を支えるという役割上、患者と関わる上で患者のニーズに対応することは看護師に求められる能力であり、これが看護の質を左右するともいえる。ところが近年、他者と関わることに苦手意識をもつ看護学生が少なくなく、特に臨地実習において看護学生は患者への対応について戸惑いを感じ、受け持ち患者へのニーズが捉えきれず苦慮している。

こういった状況への改善策として、近年の看護基礎教育では、臨地実習での効果的な教育につながる

ように、臨床場面に近い現実感のある演習を経験できるような多くの工夫がみられる。その中のひとつに、看護基礎教育における模擬患者（Simulated patient：以下SPとする）参加型の学習がある。これは、主に基礎看護学領域でのコミュニケーション演習に活用されている<sup>1-6</sup>。近年は特に多くの授業で取り入れられており、SP演習の教育効果<sup>7</sup>、SP演習後の実習への効果<sup>8, 9</sup>、SPからのフィードバック効果<sup>10</sup>、成人看護学演習での学び<sup>11</sup>など、看護学生へのさまざまな教育効果が報告されている。

従来SPとなる人たちは、一般から募集された人や模擬患者団体等が、作成されたシナリオをもとに演習での患者役として参加している<sup>1-10, 12</sup>。中には同級生同士で実施している教育機関もあるが、上級生SPを活用した演習を実施しているという報告<sup>12, 13</sup>

- |                    |            |
|--------------------|------------|
| 1 Sachie ARAI      | 千里金蘭大学看護学部 |
| 2 Ryota KITAO      | 千里金蘭大学看護学部 |
| 3 Nanae IKEDA      | 千里金蘭大学看護学部 |
| 4 Akiyo NAKAMOTO   | 千里金蘭大学看護学部 |
| 5 Junko YAMANAKA   | 千里金蘭大学看護学部 |
| 6 Setsuko TAKEMURA | 千里金蘭大学看護学部 |

受理日：2013年10月15日

は非常に少ない。

そこで我々は、実習を経験した上級生（4年生のこと。以下上級生とする）をSPとした下級生（3年生）対象の成人看護学演習授業を毎年計画・実施している。この演習授業により、領域実習を経験していない3年生は、実際の患者への対応をイメージした適切な看護援助を学べるのではないかと、また一般の方や患者団体によるSP演習とは違う何らかの教育的効果があるのではないかと考えた。そこで本研究では、具体的上級生SPを活用した成人看護学演習における看護学生の学びについて調査し、その教育効果を把握することとした。本研究の結果は、看護基礎教育において、臨地実習へつながるような看護実践能力が学べる教育的な示唆を得られるのではないかと考えた。

## II. 目的

本研究の目的は以下の2点である。

- 1) 上級生SPを活用した成人看護学演習での看護学生の学びを明らかにする。
- 2) 臨地実習に向けた成人看護学演習の教育方法について示唆を得る。

## III. 方法

### 1. 用語の定義

上級生模擬患者 (simulated patient: SP) : ある疾患の患者の持つあらゆる特徴 (単に病歴や身体所見にとどまらず、病人特有の態度や心理的・感情的側面にいたるまで) を、可能な限り演技する看護学部4年生。

学び: 演習を通して看護としての知識・技術・態度が変化すること。

### 2. 対象者

大阪府内にある大学の看護学部3年生で、成人看護学演習を履修した看護学生106名。

### 3. 調査期間

2012年7月。

### 4. 授業概要について

調査対象となった授業は、成人看護学演習の最終学修段階として位置付けられた、看護過程の展開を

目的とした単元であり、看護援助の実施を取り入れた実技演習である。以下授業内容を示す。

①演習時間: 90分×2コマ (合計180分)

②演習事例: 成人期にある急性骨髄性白血病の男性患者 (詳細省略) で、プロフィール、現病歴、治療方法、身体状況、日常生活の自立度などを研究者間で検討し、看護過程を展開した上で「事例患者の全身清拭を実施する」ことを演習授業課題として作成した。

③事前課題: 演習2週間前に上記2)の事例を対象学生へ提示し、情報の整理、事例の患者に対する全身清拭の目的、準備物品と手順の検討などを事前課題とした。

## 5. 演習授業の展開方法

- ①1ベッドあたり上級生SPを1名、下級生4~6名を配置したグループ編成とした。
- ②下級生は、事前課題をもとに、2名1組で看護師役または観察者となり、上級生SPに、制限時間内で全身清拭と更衣を2回実施した。
- ③1回目と2回目の間の20分間、1回目に実施した清拭と更衣について振り返るためのグループ討議を、上級生SPとともにいった。

## 6. 上級生SPについて

上級生SPの選定は、本研究と同時期に成人看護学実習を経験した4年生の中から希望者を募り、希望者17名で構成された。

その上級生には、下級生に提示したのと同じ内容の事例を1週間前に配布し、授業当日までに読んでくるよう依頼した。また、演習当日まで細かい演技指示等は一切出さず、下級生看護師役から促された援助について、必ず1回は拒否するようにだけ事前に依頼した。

## 7. 調査方法

研究者間で作成した自記式質問紙を演習後に配布し、回収箱にて回収した。

## 8. 質問項目

質問紙の質問項目は、以下の6項目とした。

“Q1: 今日の演習での感想、学びや気づきについて、記入してください。”

“Q2-1: 演習の内容について/事例の内容について、どう思いましたか?”

“Q2-2：演習の内容について／1つのベッド当たりの学生数（看護師役+観察者複数名）について、どう思いましたか？”

“Q2-3：演習の内容について／一連のケア実施に必要な時間に対して与えられた時間は、どうでしたか？”

“Q2-4：演習の内容について／患者役を同級生ではなく先輩が実施したことについて、どう思いましたか。”

“Q2-5：演習の内容について／演習中の振り返り（意見交換）について、どう思いましたか？”

以上、回答は自由記述とした。

## 9. 分析方法

全ての回答から、上級生SP演習を通した直接記述を分析対象とした。なお、感想や評価の記述は除外した。

それらを、すべてデータ化し、以下のように質的帰納的に分析した。

- 1) 研究者全員で前述の学びの定義に照らし合わせ、学びであると考えられるものを抽出した。
- 2) 抽出されたデータは、意味単位ごとに分けられ、さらに意味が同様と考えられるものを同じグループとし、分類した。
- 3) 同じグループのデータの意味内容を再度読み込み検討し、グループの細分化、あるいはグループ編成の組み直しを複数回行った。
- 4) グループ内のデータを読み込んで、それらに共通する事柄を考えながら、グループ内の一つひとつのデータをコード化した。
- 5) コードを抽象化し（サブカテゴリ）、さらに意味内容が共通しているものを抽象度を上げて括った（カテゴリ）。

## 10. 倫理的配慮

本研究は、大学の専門科目単位取得の授業の中で行われたが、対象となった看護学生には、研究のために本調査票の回答を使用してもよいかどうかの意思表示も合わせて回答してもらった。また回答内容や不参加表明によって当該演習への成績判定には影響がないこと、分析された結果は個人が特定されないこと、生データは厳重管理されること、生データや分析結果は研究以外で使用されないこと、研究者のみで閲覧することが口頭および紙面にて説明され

た。

本研究は、筆者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

## IV. 結果

研究への参加の同意が確認できなかったものを除外した分析対象者は、99名（回収率94.3%、有効回答率100%）であった。

### 1. 対象者の属性

対象者の性別はすべて女性であった。

### 2. 上級生SPを活用した演習での学生の学び

上級生SPを活用した看護学生の学びについて、上級生SP演習を通した看護学生の“学び”の内容を示すカテゴリ、サブカテゴリおよびコードを一覧に表す（表1）。

分析した結果、44のコードから25のサブカテゴリ、5のカテゴリが生成された。なお以下の文章ではカテゴリは【 】、サブカテゴリは「 」、コードは〈 〉、学び以外については『 』を使用して説明する。

#### ①【準備の大切さ】

10のコードと6のサブカテゴリで構成された。

看護学生は、〈患者に応じた一番良い方法を考える〉、〈患者のイメージを膨らませた計画を立てる〉、〈患者の状態に合った計画・実施にリアリティを感じる〉など「患者の状態に合わせたケアの計画が必要」であり、「患者を把握する」ことや「患者の状態をアセスメントする」など患者側からと、「事前に学習しておく」、「手順を考えておく」、「断られた時の対策を考えておく」など学生自身の行動として【準備の大切さ】について学んでいた。

#### ②【目的・根拠を考えたケア】

4のコードと2のサブカテゴリから構成された。

〈なぜこのケアをするのかをしっかりと考える〉、〈患者の状態に応じて根拠を考えて行う〉、〈根拠をもって患者に説明しなければならない〉などの「根拠を考えて援助する」ことや「目的を考えてケ

表1 上級生SP演習を通した看護学生の学びの内容を示すカテゴリーとコード一覧

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
① 準備の大切さ	事前に学習しておく	事前に学習しておかなければいけない
	手順を考えておく	きちんと手順を考えておかなければいけない
	患者を把握する	患者の事を把握しておかなければいけない
	患者の状態をアセスメントする	患者の状態をしっかりアセスメントしなければいけない
	患者の状態に合わせたケアの計画が必要	十分な計画を立てておかなければいけない
		患者ができることをなくさないようなケアの計画をたてなければいけない
		患者に応じた一番良い方法を考える
	患者のイメージを膨らませた計画を立てる	
	患者の状態に合った計画・実施にリアリティを感じる	
断られた時の対策を考えておく	断られた時の対策を考えておく	
② 目的・根拠を考えたケア	根拠を考えて援助する	なぜこのケアをするのかをしっかり考える
		患者の状態に応じて根拠を考えて行う
	根拠をもって患者に説明しなければならない	
目的を考えてケアを実施する	目的を考えてケアを実施しなければいけない	
③ 患者に適した看護のありよう	患者が受け入れることができる説明をする	患者が理解できるようにわかりやすく説明する
		患者が不安なく納得できる説明を工夫する
	セルフケアの必要性を考える	セルフケアの必要性を考える
		セルフケアの意味がわかる
	患者の安楽を考える	患者の安楽を考える
	患者の安全を考える	患者の安全を考える
	患者の状態に合わせたケア実践を考える	患者の状態に合わせたケア実践を考える
効率よくケアを行う	効率よくケアを行う	

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
③ 患者に適した看護のありよう	患者に負担をかけずに行う	患者に負担をかけずに行う
		患者の負担にならないようなケアを考える
	患者の負担を軽減し素早くケアを行う大切さ	
	環境を考える	患者の行動範囲・周囲について考える
④ 患者への配慮	ケア中に患者を意識して関わる	ケア中に患者の状態の観察や声掛けをする
		ケア中に患者のことを考える
		患者に確認が必要
		患者の気持ちになってケアを考える
	患者とのコミュニケーションのあり方を考え直す	患者とのコミュニケーションを考え直す
		患者とのコミュニケーションを考え直す
		上手に説明すると患者の意欲を引き出せる
雰囲気を作ることが大事		
	声掛けの方法を考える	
⑤ 看護の現実味	柔軟な対応の大切さ	柔軟な対応が大切だと思う
		臨機応変さが必要
	いろんな方法がある	いろんな方法があるという気付きがある
	目的に応じてケアの手順が変わる	目的に応じてケアの手順が変わる
	時間配分を考える	時間配分を考えなければいけない
	計画通りにはいかない	計画を実行することは難しい
実際は考えてきた手順通りにはいかない		
患者の訴えや要望により実際は違う		
いろんな患者がいる	いろんな患者がいる	
やってみないとわからない	やってみないとわからない	

アを実施する」ことから【目的・根拠を考えたケア】について学んでいた。

③【患者に適した看護のありよう】

12のコードと8のサブカテゴリーから構成された。

〈患者が理解できるようにわかりやすく説明する〉、〈患者が不安なく納得できる説明を工夫する〉から「患者が受け入れることができる説明をする」ことや、「セルフケアの必要性を考える」、「患者の状態に合わせたケア実践を考える」、「患者の安楽を考える」、「患者の安全を考える」、「環境を考える」など患者について考えること、〈患者の負担にならないようなケアを考える〉、〈患者の負担を軽減し素早くケアを行う大切さ〉、「患者に負担をかけず行う」などから【患者に適した看護のありよう】についての学びが抽出された。

④【患者への配慮】

8のコードと2のサブカテゴリーから構成された。

〈ケア中に患者の状態や観察や声掛けをする〉、〈ケア中に患者のことを考える〉、〈患者の気持ちになってケアを考える〉など「ケア中に患者を意識して関わる」ことや、〈患者とのコミュニケーションを考え直す〉、〈上手に説明すると患者の意欲を引き出せる〉などの「患者とのコミュニケーションのあり方を考え直す」ことから【患者への配慮】についての学びが抽出された。

⑤【看護の現実味】

10のコードと7のサブカテゴリーから構成された。

〈計画を実行することは難しい〉、〈実際は考えてきた手順通りにはいかない〉、〈患者の訴えや要望により実際は違う〉などから「計画通りにはいかない」ことや、「柔軟な対応の大切さ」、「いろんな方法がある」、「目的に応じてケアの手順が変わる」、「時間配分を考える」、「いろんな患者がいる」、「やってみないとわからない」など【看護の現実味】についての学びが抽出された。

3. 学び以外の内容

学びに該当しなかった内容の一部を紹介する（表2）。

自己の振り返りとして、できなかった、足りないことがわかったなどの演習時の自身の評価や、復習や練習などの必要性、また頑張りたいと今後の意欲につながる記述が見受けられた。

先輩の存在から感じられたこととして、緊張感やリアリティがあった、現実味を感じたという演習中の学生自身の気持ちや、患者の苦痛を考えたケアについて助言してもらったり、自分の行ったことを先輩が評価してくれた、他の人の意見を聞いて参考になったなど上級生からの指導や評価に関する記述が見受けられた。また臨機応変さ、患者のことをよく知る、目的をきちんと説明する必要性やセルフケアのあり方や根拠や目的をもっておくべきなど援助に対して上級生から教えられたといった内容の記述が見受けられた。

V. 考察

1. SPを活用した成人看護学演習で援助の実践・評価まで実施したことによる学び

本研究では学びの内容として、【準備の大切さ】

表2 学び以外の内容の一部

自己の振り返り	できなかった
	足りないことがわかった
	復習が必要
	練習が必要
	再認識の難しさ
	頑張りたい
	ケアの違いを実感した
	実習へのイメージがついた
先輩の存在から感じたこと	緊張感を味わった
	リアリティがあった
	現実味を感じた
	患者の苦痛を考えたケアについて助言をもらった
	臨機応変さ
	患者のことをよく知る必要性
	セルフケアのあり方について
	目的をきちんと説明する必要性
	根拠や目的をもっておくべきだということ
	自分の行ったことを先輩が評価してくれた
他の人の意見を聞いて参考になった	

【目的・根拠を考えたケア】【患者に適した看護のありよう】【患者への配慮】【看護の現実味】の5のカテゴリーが生成された。これらの学びのカテゴリーは、看護場面におけるコミュニケーションの重要性の気づきをもたらし<sup>1)</sup>、リアリティが高く実感を伴う考える学習<sup>3)</sup>となっており、これまでSP参加型演習の効果として報告されている研究報告と一致すると考える。

また、看護過程を展開していく上での、患者の情報収集、アセスメント、計画、準備、実施のそれぞれの段階で具体的な看護援助を考えることの必要性について学ぶことができていた。これは実際に全身清拭・更衣という看護援助することで、患者への説明、観察、患者の状態に合わせたケアが具体的に必要であるという現実場面に遭遇し、必要性を実感するに至ったことが、看護学生の気づきや学びにつながったと考えられる。

【準備の大切さ】でのサブカテゴリー「断られた時の対策を考えておく」や【看護の現実味】でのサブカテゴリー「いろんな患者がいる」では、看護学生たちは上級生SPからケアを1回拒否をされた体験から、臨床場面に近い失敗体験を感じ、また情動的に揺さぶられる思いをし、このような体験が、看護学生にとって患者との関わりの意味を深く考え、やがて学びとして気づく機会となっていった可能性がある。

## 2. 上級生SPから得られた学び

今回の研究結果からは、上級生SPだからこそ学べたものを直接的に見出すことはできなかった。しかし上級生に対する看護学生の感想からは、リアリティや緊張感とともに、看護について教授された内容が抽出された。

今回の演習では、1回目の演習内容を振り返るために、2回目の実施前に、上級生と討議する時間を設けた。そのため援助をした看護学生は、上級生SPから直接評価され、指導される機会をもつことができた。この経験から、〈患者の行動範囲・周囲について考える〉、〈患者の状態に合わせたケア実践を考える〉などの【患者に適した看護のありよう】や〈ケア中に患者の状態の観察や声掛けをする〉、〈ケア中に患者のことを考える〉、〈患者の気持ちになってケアを考える〉など、患者の気持ちの理解が深まったのではないかと考えられる。また上級生に教授された内容が、そのまま自分たちの学びとして

記述されていたことから、看護学生にとっては、上級生SPとの関わり自体が、看護学生なりの学びに繋がっていたのではないかと推察できる。

## 3. 上級生がSPをするということの意味

森谷ら<sup>13, 14)</sup>は、上級生がSPをすることで、上級生自らの看護に対するリフレクション効果や後輩への伝達を行っていたと報告している。本研究で上級生SPは、特に細かな演技指導を受けず、教員から事例と簡単な条件を提示されたのみであった。従って上級生たちは、自身がすでに経験してきた約10か月間の領域実習を通し、患者と関わったことや看護の実際を体感した者として、事例上のSPを自分なりに解釈し、のびのびと演じていたと考えられる。

一方地域住民によるSPは、学生に否定的な感情から肯定的な反応、看護職への期待、自己の健康感や役割意識へと意識が変化することが報告されている<sup>14)</sup>。言い換えると、一般のSPは、SPとしての訓練や経験を重ねることで、看護学生へのフィードバックをもたらすと考えられる。

以上のことから、SPを活用した成人看護学演習から期待できる教育効果を、上級生SPと一般SPを比較すると、上級生SPの方が、自身の体験をもとにしたSPを演じることができることに加え、先輩でもあり同じ学生としてより近い存在でもあることから、演習で援助する看護学生の気持ちや知識・態度などのレディネスを想像しながら演習に参加しているのではないかと考えられる。また上級生は、臨地実習を経験することで、困難と予測されることに対処するためのアドバイスができる存在となる。従って、上級生SPを活用することは一般のSPよりも高い教育効果が得られると考える。

## 4. 自己の振り返りについて

自己の振り返りとして、演習中の看護学生自身の評価や、演習での体験による足りないことへの気づきがみられた。

SPは演習中に感じたことを学生にフィードバックする評価役割をもち、学生は自分自身の対応についてフィードバックを直接受けることにより、対象者のその時の感情や状況について具体的に知ることができる<sup>2)</sup>。そのようなプロセスを通して、学生は自分自身の看護技術の習得レベルや、応用能力の未熟さに気づき、自覚を持つことができることも報告されており<sup>2)</sup>、本研究においても同様の結果と

なっていた。またSP演習の教育効果は、実施者と観察者とでは、実施者のみ自分を振り返る機会ができ<sup>6)</sup>、今回の演習で全員が看護師役として援助を実施できたことで、記述としては現れてはいないが、自己を振り返る機会にできたのではないかと考える。

看護職者は、リフレクションによって対象者への理解や認識が深まり、また対象者の新たな側面を発見し看護実践を行うことで、さらに新たな看護の可能性に気づくことができる。その可能性の気づきが自己成長・自己実現、自信ややりがいへとつながっていくとされる<sup>16)</sup>。学びの内容や看護学生の自己の振り返りから、学生は、リフレクションによって生じた自身の内面の変化として複数の変化が生じていたと考えられる。従ってSP演習の効果のひとつにリフレクションができていたと考えることができる。

## 5. 領域実習への効果について

自己の振り返りの中には、実習へのイメージがついたと記述している学生もいた。SP演習は、看護学生にとって場面演習としてのリアリティが高いが、臨地実習ほどの緊張感を抱かずに学習できる方法である<sup>17)</sup>。特に看護学生は、成人看護学実習前後の変化として不安や記録物への負担を感じ、対象の理解が不足しているために看護計画の立案に困難を感じていた、と報告されている<sup>18)</sup>。SP演習後の実習評価では、SPに向かい合う経験やSPからのフィードバックなどが患者のイメージを膨らませることに有効<sup>19)</sup>で、SPの活用は看護者の態度形成に役立つということも報告されている<sup>8)</sup>。またSPを導入した観察について学んだ内容は、疾患との関連性や観察の方法、援助につなげた観察として実習で活かすことができ実際に患者を観察するうえでの効果がある<sup>20)</sup>。さらに実習の役立ちよりも看護の対象に対して、基本的な態度を身につけることや患者の話を聞くことができたという報告もある<sup>21)</sup>。

以上のことから、SPを活用した演習は、臨地実習で直接患者への看護に遭遇することで大きな緊張や不安を伴う看護学生への前段階として、さまざまな教育効果が期待できるものであることが推察できる。従って、成人看護学演習での総まとめとしての授業の位置づけは適切であることが確認できるとともに、成人看護援助論演習での上級生SPを活用した演習は、基礎実習を終了している看護学生にとっ

ても自己を振り返る機会となり、必要な知識や技術の獲得への意欲を引き出すことにつながり、より具体的に考える学習の機会となることが示唆された。

## VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、上級生SPを活用した成人看護学演習への効果や実習への示唆を得ることができた。しかし授業時間内での調査であったため、学生にとってはいくら成績と関係ないとはいえ、回答には多少のバイアスが入っていた恐れもある。今後研究を継続していく上でも、研究方法の吟味は必要である。さらに本研究で調査した学びは、1回の半構成的質問で看護学生が回答したものであり、対象となった看護学生の学びがすべて抽出されたとは言い切れない。学びは変化していくものでもあるので、複数回、かつ対話的な形での調査方法も今後検討する必要がある。また上級生SPを活用した演習後の実習での評価や効果などについては今後の課題として検討していきたい。

## VII. 結論

本研究は、上級生SPを活用した成人看護学演習における看護学生の学びを明らかにし、成人看護学領域実習に向けた教育的な示唆を得ることを目的とした。

その結果以下のことが明らかになった。

1. 上級生SPを活用した成人看護学演習での看護学生の学びとして、44のコード、25のサブカテゴリから【準備の大切さ】【目的・根拠を考えたケア】【患者に適した看護のありよう】【患者への配慮】【看護の現実味】の5つのカテゴリが生成された。
2. 看護学生自身の評価、復習や練習の必要性など自己の振り返りや、上級生SPに対する感想や看護学生の援助に対する評価、さらに上級生から教えられた内容など先輩の存在から感じたことについても抽出された。
3. 上級生SPは、一般SPと比較して、臨地実習を経験したことによる、実習での看護経験や実際の患者から学んだ内容について演習を通して教授していることが推察でき、領域実習前の学生にとってはより効果的であることが考えられた。

4. 看護学生は、上級者SPを活用した演習においてリフレクションできていることが推察された。
5. 領域実習を経験する前に上級生SPを活用した演習を取り入れることで、看護学生の不安や緊張を和らげ、看護援助や患者理解を深める効果が期待できることが示唆された。

## 謝辞

本研究は、平成24年度千里金蘭大学看護学部特別研究Bの助成を受けた研究の一部である。

## 引用文献

- 1) 堀美紀子, 松村千鶴, 淘江七海子, 模擬患者を導入したコミュニケーションスキルトレーニングの学習効果, 香川県立医療短期大学紀要5. 105-114(2003)
- 2) 富安俊子, 鬼塚美映子, 矢野知佐子, 他, 看護学生のための模擬患者演習によるコミュニケーション・トレーニング, 聖マリア学院紀要19. 97-106(2004)
- 3) 竹田恵子, 太湯好子, 谷坂佳苗, 模擬患者演習 (SP) を導入した看護面接教育の取り組みとその課題, 川崎医療福祉学会誌14(1). 27-40(2004)
- 4) 澁谷幸, 中田康夫, 田村由美, 他, 模擬患者を導入したコミュニケーション演習の意義-学生の受け止め方に対する分析を通して-, 看護教育46(7). 574-579(2005)
- 5) 荒谷美香, 務臺理恵子, 加藤紀代美, 他, 臨地実習につながる模擬患者参加型コミュニケーション演習, 看護展望35(4). 0340-0345(2010)
- 6) 石原克秀, 青井聡美, 吉田なよ子, 他, 模擬患者 (simulated patient) 参加型演習の教育効果について, 日本看護研究学会雑誌36(3). 245(2013)
- 7) 森谷利香, 九津見雅美, 池田七衣, 他, 看護系大学生の学習意欲とコミュニケーション能力に関する研究, 千里金蘭大学紀要8. 178-190(2011)
- 8) 河合千恵子, 模擬患者を利用した教育が学生の態度に与えた影響, *Quality Nursing* 7(7). 577-583(2001)
- 9) 加悦美恵, 河合千恵子, SP (模擬患者) 参加型授業において学生が思い描く患者像の理解, 日本医学看護学教育学会誌16. 20-26(2007)
- 10) 篠崎恵美子, 渡邊順子, 坂田五月, 他, 模擬患者による解釈モデルの説明が学生の看護アセスメントの認識に及ぼす影響, 日本看護学教育学会誌20(1). 49-61(2010)
- 11) 高橋奈津子, 庄村雅子, 佐藤幹代, 他, 模擬患者 (SP) を活用した成人看護学慢性期事例演習での学生の学び, 東海大学健康科学部紀要14. 47-54(2008)
- 12) 藤崎和彦, 模擬患者によるコミュニケーション教育-その歴史とコミュニケーションのポイント-, *Quality Nursing* 7(7). 548-556(2001)
- 13) 森谷利香, 池田七衣, 新井祐恵, 他, 模擬患者を導入した演習による看護系大学生の学び-第3報: 演習参加者の学びの特徴, 第32回日本看護科学学会学術集会講演集. 339(2012)
- 14) 新井祐恵, 池田七衣, 九津見雅美, 他, 模擬患者を導入した演習による看護系大学生の学び-第2報: 患者役の学び, 第32回日本看護科学学会学術集会講演集. 339(2012)
- 15) 阿部オリエ, 小手川良江, 本田多美枝, 他, 看護学実習前演習に地域住民が模擬患者 (simulated patient: SP) として参加することの意義に関する研究, 日本赤十字九州国際看護大学紀要11. 49-58(2012)
- 16) 上田修代, 宮崎美砂子, 看護実践のリフレクションに関する国内文献の検討, 千葉看会誌16(1). 61-68(2010)
- 17) 鈴木玲子, SP参加のコミュニケーション教育の実践から-必要な準備とフォローについて-, 看護教育45(10). 834-838(2004)
- 18) 中澤洋子, 立石和子, 原谷珠美, 他, 成人看護学実習前後の学生の変化に関する研究-「不安」「看護過程展開」「コンピテンシー」を中心に-, 北海道文教大学研究紀要36. 127-136(2012)
- 19) 萩あや子, 肥後すみ子, 奥山真由美, 他, SP導入によるコミュニケーション演習が臨地実習に及ぼす影響, 岡山県立大学保健福祉学部紀要14(1). 29-39(2007)
- 20) 小林由香, 田邊直美, 間可優子, 他, 模擬患者を観察することに焦点を当てたロールプレイの



効果－基礎看護学実習前の効果的な演習の一考察－日本看護学会論文集 看護教育39. 301-303(2008)

- 21) 中山亜弓, 杉本幸枝, 土井英子, 模擬患者演習 (SP) を活用したコミュニケーション演習の学びの分析－基礎看護学実習後の振り返りを通して－, 看護・保健科学研究誌 8 (1), 141-147(2008)

